

まえがき

平野憲雄

はじめに、技術室報告6号を発刊できたことを投稿者はもちろんのこと編集に当った皆様に深く感謝申し上げます。この技術報告は定年退職される技術員からの投稿がセールスポイントです。今年度は、矢部征さんが定年退職されます。長い間ご苦勞様でした。矢部征さんは昭和39年に鳥取微小地震観測所ができる時に就職され、以来40年に涉って、地震はもちろん地下水、地電位、地磁気の観測とデータ整理をして来られました。地震の研究者は多いので記録収録から整理まで行う技術員は多いですが、地下水、地電位、地磁気の研究をされている人は極少数ですから支援する技術職員も少ないです。長年に渡り記録をとり続ける人がいることは、これら少数の研究者達にとって他に替えがたい貴重な存在になっているものと思います。

今年度は、新規の技術員に女性を採用しました。現在は火山活動研究センター（鹿児島県）に転勤して、父親と同じ年代の技術員から測量や観測技術の研修を受けています。今までに女子学生がフィールドに出て活躍をしていたので、女性では無理だとの意見は聞こえて来ません。ただ常勤者としてフィールド業務をするには、臨時の女性スタッフへの対応では不十分な点が発見されると思います。始めて気づく不備な施設があるかも知れません。しかし、災害を受けるのは男性も女性も同じです。女性の視点でフィールド業務を遂行する場合、男性が気づかなかった事を彼女から発信して来るのを楽しみにしています。

今年度のプロジェクトは14年度から続いている「防災研究所で蓄積された印刷物や映像情報の電子ファイル化とホームページで高速検索可能なシステムの構築」と、新規で大大特の「紀伊半島における自然臨地震観測」2つを担当しました。前者は、年報の全巻、ブレチン20号以降、防災公開講座テキストのWebでの検索が完成しました。今後は記録紙や映像を検索できるように計画しています。後者では、13点もの臨時観測点を設置し毎月データ回収に回っています。データ整理も順調で、来年度は紀伊半島の北部へさらに15点設置する予定です。新年度には有力な技術員が1人加わります。しかし、28点の維持は今までの2倍の労力が必要になります。同じ方法では行き詰まることは目に見えています。また、プロジェクト以外の技術支援依頼も沢山ありますから余裕はありません。京大全体の人件費が毎年減って行きますから、どこでも効率向上を強いられています。技術室でも限られた人材で効率よくこなすための工夫が益々求められています。知恵を出し合えば無事に運営していけると確信しています。